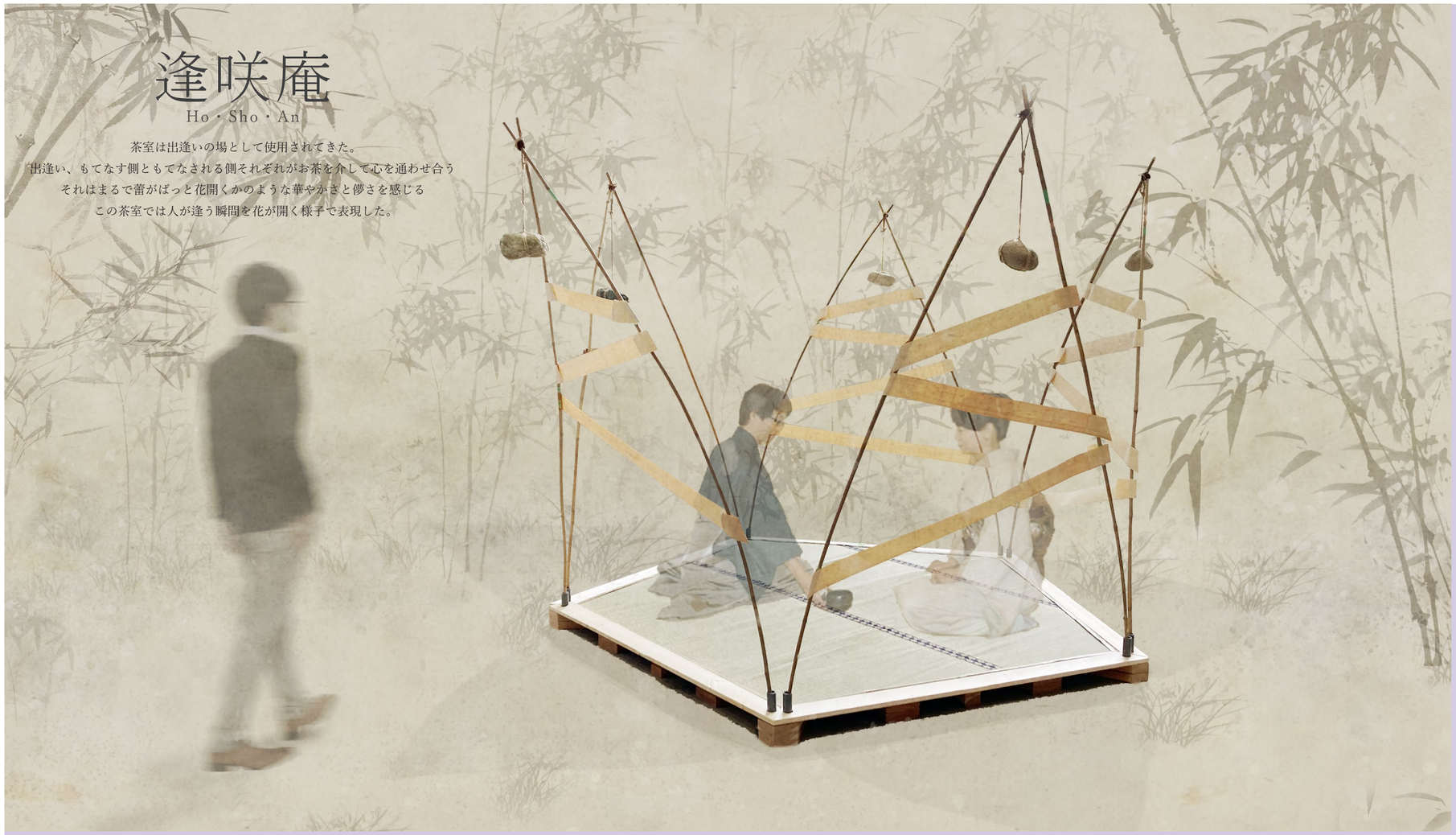
逢咲庵

Ho・Sho・An

茶室は出逢いの場として使用されてきた。
出逢い、もてなす側ともてなされる側それぞれがお茶を介して心を通わせ合う
それはまるで蕾がぱっと花開くかのような華やかさと儚さを感じる
この茶室では人が逢う瞬間を花が開く様子で表現した。



「一期一会」

一期一会とは、茶道における心得である。
人生のたった一度の出会い、たった一日のお茶を出すだけであっても、
亭主と客は、その出会いを大切にし、相手に対して
最善を尽くしながらお茶を点てる。

- 出会いで花開く茶室 -

秋の空の中、茶室での出会いの素晴らしさをテーマに設計を行った。
茶室を出会いの場として捉え、普段は閉じている蕾の茶室が
中に入る人の操作によって花開き茶室の場を華やかに彩る。
竹・石・麻といった自然の素材で和の空間である茶室を表現した。

竹の使用

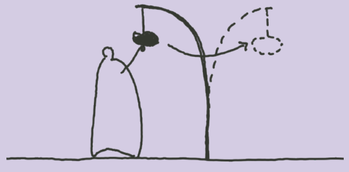
日本では現在放置竹林が問題となっており荒れ果てた竹林には小径の使い道に困るものばかり採れるという問題点がある。竹のしなるという性質を活用しつつ、細い竹でも使用可能な構造を考案し提案する。

桔梗

全体の形のイメージとして紫色の花が特徴の桔梗を使用する。
五角形のバランスの取れた形状かつ落ち着きのある見た目である。
茶室では秋の花として飾られることもあり、「秋の空」をテーマにした
今回の作品にふさわしいと考えた。

石の移動による変形

竹をしならせるファクターとして石を利用する。
それぞれの石の重みによって竹はしなり、茶室が開閉する。
石は、日本人の精神文化において、さまざまな意味を持つ。
竹に吊るされた石は、茶室の開閉させながら、招かれた客の精神性を高める。

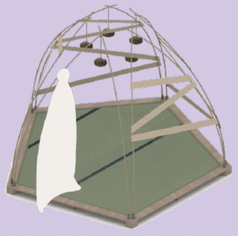


茶会に集中する空間にするため、関守石で結界を作る

雨に濡れると、色合いが変わる

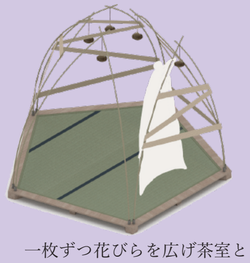
長い時をかけて苔むせば風合いが変わる。

■展開ダイアグラム



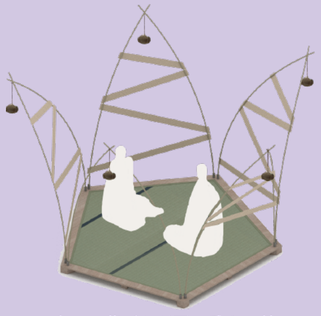
亭主が茶道口から茶室内に入り花びらを広げる準備をする

▶



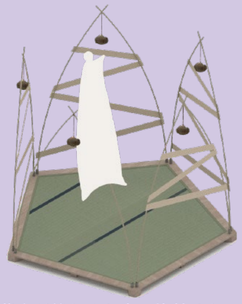
一枚ずつ花びらを広げ茶室としての空間を作っていく

▶



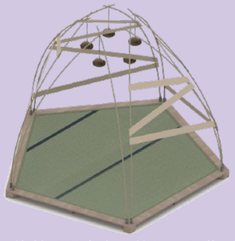
全ての花びらが石の重さで外に開き準備ができた状態で茶会が始まる。

▶



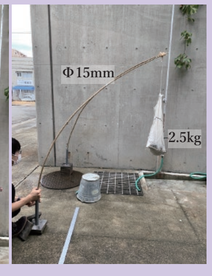
茶会が終わると中の片付けをした後、花びらを閉じていく

▶

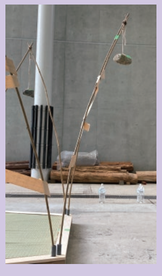


片付けが完全に終わると花びらが全て閉じ、次の茶会に備える

■工夫した点



モックアップの段階で竹の太さを選定した。直径 30mm の竹では 5kg の重りでようやくしなったが、直径 15mm の竹の場合は 2.5kg の石でしなったため、安全性を考慮し直径 15mm の竹を使用して製作を行った。



実際の作品で 2.5kg~3.2kg 程度の石を吊るすことで、安全な範囲でたわみをもたせた。手で石を動かしやすく顔に当たる危険がない高さとすることで安全性を確保した。

土台は五角形の頂点に向かう材と辺に垂直に向かう材で構成され畳のどの部分に乗っても安定するよう工夫をした。竹の根本部分は塩ビパイプを木に開けた穴に通すことで固定したものに差し込み成立させる。